

土 淨



七月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一週一日發行）
 昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
 昭和三十一年六月二十五日印刷
 昭和三十一年七月一日發行

第二十二卷

第七號

御歌

池の水

人の心に

似たりけり

濁り澄むこと

定めなければ

目次

吉田絃二郎追悼特集號

卷頭言……………(1)

遺影(晩年の絃二郎先生)……………(2)

句集……………吉田絃二郎(3)

遺稿 讀書日記……………吉田絃二郎(4)

妙好人……………池田立基(6)

吉田絃二郎先生を想う……………和田正系(8)

吉田先生と法然上人鑽仰會……………佐藤賢順(11)

先生と編輯部……………眞野龍海(14)

吉田絃二郎著作年表……………昭和女子大近代文學研究室調(16)

ホノルル通信——第五信……………松濤弘道(20)

祖法然上人の歌(二)……………澤田岳潤(22)

佛教入門(その七)……………佐藤密雄(27)

本誌が發刊される時、誌名の候補の一つに、「眞實」ということばがえらばれていたことが、おぼろげではあるが、記憶にのこっている。時の流れが重ねられた今日でも、このことばの、ドツシリした重さはかわつていない。いや、一層、重みが加つたようにさえ思える。戦後、アメリカとの接觸が必要以上に多くなつた今日、なんとなく、このくにの、すべての方面が、明るくなつたことはいゝが、その反面、軽くなり、感覺的になつたように思われる。そこで、「眞實」というようなことばが、やぼつたくなつたように思われては非常に困るのである。特に、若い世代の人々のところに、ひゞかなくなるようでは困るのである。

今の世に、非常に重んぜられている科學というものも、そのもとをたづねてゆけば、人間の眞實を求めてやまないところから出發しているものに外ならない。人は、すべてに對して、そのものゝほんとうのところを、きわめようというところをもつてゐるのだ。このことを忘れてならない。

法然上人も「眞實」ということをもう少し、主體的に言いあらわして、「至誠心」と言つて居られる。人には、三つのところが大切であると申され、その第一番目に、この「至誠心」をあげて居られるのである。人間をきわめ、世間をきわめ、宇宙をきわめてゆくには、この「まごころ」を重んじてゆかなければならない。

東洋の重さは、佛教のおもさは、ドツシリと、一見して、やぼつたくみえても、その本質を見失つてはいけないと思う。(佐藤良智)



閑古鳥未だ鳴かず

山の宿

昭和十三年四月

晩年の絃二郎先生



山雨朝又暮

對山獨有思

白雲悠々過

秋風已落莫

(昭和十三年十月)

きのふもちりけふもまたちるさくらかな

(昭和十四年四月)

三日月のおちて山路のさむさかな

(昭和十四年十月)

箱根路のわか葉のつゆや笠のうら

(昭和十五年六月)

梅若葉あかつき寒き山路かな

(佐藤賢順氏宛書簡より抜萃)

遺稿

讀書日記

吉田 絃二郎



十月十九日 薄曇り 終日ひたき鳴く。鎮守の宵宮なれば大鼓の音窓にひびく。

續き物の原稿を書き上げ、ほつと一息の態なり。曲亭馬琴の「後の爲の記」を読む。

新しい本を読むのもいいが、書齋に入つて、そこらに在る古い時代の本を手當り次第に読むのもいい。幾度も読み直しても飽きない本といつてはさうざらにあるものではないが、昔から傳へられてゐるほどの本は一年二年の間を置いて讀めば、また新たな味も出て面白く讀まれるものである。

馬琴ほどの人の物であれば短い隨筆風のものでも流石にと思はれるものがある。否、「八犬傳」などのやうに正面を切つた表藝の物よりも、樂屋裏の「馬琴日記」風の物の方にかへつて惹きつけられるところがある。

このことは繪の場合でいへば、完成された繪と素描とである。たとへばダ・ビンチなどの繪を見てゐると誰れでも惹きつけられるが、しかしダ・ビンチの素描には、より以上の親しみを感ずる。素描にはその人の生活の呼吸が一層こまやかに感じられるからであらう。

ドストエフスキイの作品を読んだ人にとりては、かれの私的生活を知ることは一層の興味である。わたくしは二十年ばかり前、英國の某出版會社から限定本で出されたシングの生活斷片を描ゐた本

を丸善で購めて秘藏していたのが、戦時中どこかへ紛れ込んでしまった。わづか四五十頁の小本で、値は當時日本の全集物一揃買へるほど高價といへば高價であつた。その内容としてはシングの巻首の吸ひ方、一本の巻首を何の程度の長さまで喫んだかなどといふことまで書いてあつた。シングの愛讀者にとつてはこんなことも魅力があるのであらう。

トマス・ヘアデイの生活を書いた本の中に、テムズ川に見える高臺にかれが家を新築した時、建て前のすんだばかりの家の屋根の上までかれが登つて行つたといふことが書いてあつた。愛讀者にとつては、作者の不用意な生活斷片が存外面白く感じられるものである。

話は元にもどる。日本では馬琴ほど身邊の日常を細かに書き残した人はないであらう。

「後の爲の記」は一人息子の琴嶺に先立たれた馬琴が、その愛子の三十八年の生涯を綴つたものであるが、惻々として人の心に迫るものがある。まことに「斷腸の記」といふべきものである。

琴嶺が死んだのは天保六年五月八日で、小石川茗荷谷の深光寺といふ浄土宗の寺の墓地に葬られた。數代前からの瀧澤家の菩提所で、後馬琴もここに葬られた。わたくしは學生時代に一度深光寺に馬琴の墓に詣つたことを思ひ出す。四十五六年前のことである。

馬琴はかねて琴嶺の肖像を渡邊華山に描いてもらつたものであつたが、いろいろの手ちがひがあつて、華山が馬琴の家を訪ねて來たのは琴嶺が死んだ翌日であつた。無論華山は琴嶺の死んだことは知らないで訪ねて來たのであつた。琴嶺の死を聞いた華山の驚きはいふまでもない。乞うて柩の蓋を開かせて、死せる琴嶺の顔を寫した。

これより先き、三月七日に山東京山が馬琴を訪うて來て「實はあなたが亡くなられたといふ話を聞いたので」と語り、健在な馬琴を見て大笑ひして歸つて行つた。馬琴はこの事を記して、「これもやがて琴嶺が死ぬ前兆であつたらう」と書いてゐる。

(原文のまゝ)

妙好人



池田立基

吉田絃二郎先生と私とは、昭和十三年以來のおつきあいに過ぎません。明枝夫人の御命日に御回向に参りましたのが御縁になり、毎月一日、お位牌前で御回向申上げた後、夕食の御供養を受けながら、文學談と劇談とで夜の更くるをも知らず、電車のなくなる時は態々自動車でお送り下さる事も一再ではなかつたのです。其後夫人の七回忌の御法要を私の寺で勤めまして以來講安寺の檀家として盆暮のお附届をなさる様な間柄になりました。御不自由のお體になりましたからは、外出が不能になりましたので、私の來訪を非常に心待ちにせられて居りました。

たので、私も必ず毎月一日の午後は瀬田で過すことになつて居りました。併し毎回四五時間語り合つて居る間にも、信仰談はほとんどありませんでした。私が歌舞伎に特殊の關係があり、また毎月劇場廻りをして居りますので、劇界の消息を聞きたがつて居られましたので、私も耳にした新しい事を頭の中で編輯してお話をします。これが先生一ヶ月間の唯一の樂であると申して居られました。其他御一緒に旅行をしました輕井澤や、京都の風物または花鳥の賞美、たまには依頼された舞踊の歌詞について御相談などありました位で、私の職分、寺の住職と

しての信仰談は殆んどありませんでした。ところが晩年の夏、私が講安運動の旗擧げについて御相談にお伺ひ致しました時、初めて信仰談で約二時間程、お茶も飲みます語り続けられました。先生は青年時代より信仰には餘り關心を持たれなかつたのが眞實の様です。基督教は元より佛教に關する讀書は、相當の深さに達して居られますが、先生御自身は來世よりも今生の美しい生活、自然の美、人情の美、その中に楽しい生活を見出したいと考えられたのださうです。ところが明枝夫人の御逝去が一劃期となり、今までは餘り心をとめなかつた來世と云ふ問題が間近に迫つて來たさうです。淨土と云ふ世界へ夫人が徐々と導いて行かれる様な氣がして來られた際、たまにたま増上寺法主大島大僧正より直接「吉田さんは未だ淨土の信仰になつて居られない」と注意されて以來、苟かに新信仰の確得に努力されたさうです。最近漸く淨土へ往生したいと云ふ氣持が起つたが、往生の出來さうなお念佛が減多に申せない。妻に對する愛慕の念佛は口に出るが、この身が阿彌陀如來のお迎を受けて西方へ往かれると安心の出來るお念佛は極めて稀にしか申せない。そこで一念でも往生は出來ると云ふ有りがたい元祖様のお言葉ではあるが。眞に往生の出來るお念佛は十念は愚な

事、一念だけでも仲々申せるものでない。だから私は多念主義である。折にふれ雜念を離れて數十遍のお念佛を、亡妻の位牌前で申して居る間に、心から彌陀如來と極樂淨土と云ふ世界に溶け込んで居たと、氣のつくことが時々あります。その時は多念中から往生の出來る一念を拾つた様な氣がします。」と云はれました。その時私が三心具足のお念佛のお話を致しますと、先生はお笑ひながら「お念佛は易行難信の法ではなくて、難行難信の法ですね」と仰言いました。私は先生に最期に結論として申しました「信じ得れば易行で、信じ得ざれば難行であります」と申し上げて辭去しました。田園クリニックで檜林國手の手術に信賴し、驚異的の快癒を一週間味はれ莞爾として私の訪問を迎へられ、一ヶ月の後には憧れの京都の風光に接しやうと約束されました。數日、突發的の腦出血で、京都より更に西方へ、憧れの蓮臺上に居を移されました。南無阿彌陀佛 合掌

☆

☆

☆

☆

吉田絃二郎先生を想う



和田 正 系

×

吉田先生との十数年間の御縁は、この雑誌浄土が仲立ちであり、鑽仰會が結んで下さった本當の佛縁であつた。

先生のかくれも無き文名は勿論それ以前から知つてゐたことであり、あの獨特の味を持つ小説や隨筆などを讀んだのは古いことであつた。然し直接おめにかゝつてお話する

機會を得たのは浄土讀者の會であつた。それは昭和十四年三月十五日、日比谷の松本樓で開かれたもので中々盛會であつたが、その席上、佐藤賢順先生の御紹介で始めて先生とお話することが出来たのである。先生は丁度その月の雑誌浄土に掲載された私の「なつかしい太秦の觀音様」とい

ふ一文をどうして讀まれたのかよく御存知になつてゐて、大變ほめて下さつたのである。私はこの文壇第一の大家が何のゆかりも無い私などの書いた謂はゞ雜文を讀まれたといふことが既に不思議に思はれたし、ましてほめて下さつたといふことは如事に意外なことであり感激であつたのである。

この事が直接の御縁となつて、それから私は随分たびたび先生の御宅に伺ふ様になり、又先生もはるばると泊りがけで房州の拙宅までお出でになつたのである。それから太平洋戦争、つゞいて終戦といふ長く且つ悲慘な變事を間に挟んで十数年、いつも變らぬ暖い交際と指導とを頂いてゐ

たのであつた。

×

その長い間の先生の想ひ出。到底簡単に述べ盡すことは出来ない。先生から頂いた御手紙は二百通に垂んとする。その一つ一つに深い回想がまつはりついてゐるのである。

どれを取り出して見ても、その時々先生の御生活、身邊環境のありさま、御心境をありありと眼前に見る想ひがすると共に、逆にそれを頂いた時の私自身の生活が昨日の如く想ひ出されて一層先生を懐しく思ひ起させるのである。

先生のお便りの大部分は手紙であつて葉書は極めて少い。そして殆んど全部が毛筆で書かれお手紙は和紙の巻紙を使つてある。ペン書のお手紙は唯一通あるが、最晩年のもので例外とも云ふべきものである。

先生の手蹟は實に美しく見事なもので、これだけで立派な藝術品である。お手紙の來るたびに私は目の前に開いたまゝ、本當に感激之を久しうしたものである。

お手紙は實にこまかい神経と暖い心情の籠つた、しみじみとした文章であるところへ、あの神韻縹渺、雲の如く水の如く、淡々として然も無限の味を持つ筆の跡である。誰に見せても三歎する。殊に少しでも書道に興味を持つた人ならば一寸は息も出來ぬ位のものである。戦争も未だ初めの頃までは巻紙もいろ／＼美しいものをその時々にお使ひ

になつた様である。厚手のもの、薄手のもの、白いもの、薄質のもの、薄緑のもの、薄桃色のもの、薄墨色のもの、滑かなもの、あらいもの等々、そのどれもがそれぞれに美しい。

×

お手紙には短いものもあるが大體は長いが多い。一間を越すのがある。十九年四月十二日のは長くて終りの方に木の畫を二つも模寫され、「これも木米の嵐山行樂圖に候かく模しては味も曲もなく候も木米の雲の線など驚くばかりに候これは豊米と御座候御矢草までに戲畫致し候」とある。又、手紙の執筆中に親子の小壽鶏が庭に降りて來たとのことで、その寫生を添へてある。先生は元來畫も中々面白いものを描かれ獨特の味を持つこと、その書と同様である。又時には突然興に乗つて描かれた寫生畫や俳畫の如きものを送つて下さつたこともあつた。面白いことに先生のお手紙には速達が非常に多いのである。普通に云へば別に速達の必要もない内容なのであるが、その作品を速く見せたいといふ御氣持からであらうと思つていつも感激したのであつた。又時には切手の貼つてないのや郵税不足のもあつて之も中々面白いことであると思つた。

×

先生のお便りには手紙にも葉書にも殆んど全部と云つて

良い程終りに俳句、和歌、詩などが添へてある。それが又實に感銘深いのである。終戦直後の早春には

梅さかばうたもうたはむ酒のみて

かなしきうたをうたはむとおもふ

この山河美しきかな酒のみて君よ

うたはむ梅のさくころ

こがらしはこよひもすさぶ君が住む

南の海のひたにこひしき

又、二十年二月四日瀬田のお宅に伺つて一晩泊めて頂き翌五日歸つたのであつたが、その夕は玉川の河畔に薄雪降り半輪の月が實に印象的であつた。六日の日附で速達が來てそれに

淡雪竹林暮 天上半輪月

送君立江頭 春來猶遠思

これは實に有がたい詩であつた。あとで特に所望して掛軸に揮毫して頂いた。

又、同じ二月十二日のお手紙には

昨夜斷迷悟 今朝綿々情

草庵春已到 禽鳥囀々飛

これは表装出来る様特別に畫仙に書かれてあつた。この詩はその前年、つはぶきの寫生に添へて書かれた。

昨日はさととり今日はさとらず秋の暮

と双璧をなす。

×

私は先生のお手紙の一部を抜萃して先生を偲びたいと計畫し材料を揃へたのであつたが、早くも以上で紙が盡きて了つた。

今、私の机の上には先生に案内して頂いて多摩川のほとりを散歩した時拾つた埴輪らしい土器の一片が置いてある。この附近ではよく古代人の土器が發掘されると話された先生の親しい肉聲はもう永久に聴くことが出来ないのである。あの澄んだ先生の聲を。(三一、六、一二)

(筆者 醫博・千葉大學講師)

×

×

×

×

吉田先生と法然上人鑽仰會



佐藤賢順

この題目の一篇を書こうとして、私は創刊號からおよそ五年間にわたる「浄土」の合本を持ち出してきて、吉田先生の思い出にふけるとともに、わたくしどもの宗祖鑽仰運動や刊行事業をふり返つてみた。感慨が深い。丁度、昭和十年頃の佛教復興の氣運が盛んになつた當時から——勿論その背景には日本民族主義の擡頭があつて、それが民族の團結の上から、宗教を必要とした、ということもあつたのだが——太平洋戦争の勃發する寸前の頃までの、いわゆる一觸即發の國家體制にある期間のことである。「浄土」の合本は、その當時の宗教運動を知る文獻としても、既に貴重な資料となつてしまつた。

「浄土」が發刊されてから、文筆方面の人で、浄土教や法然上人に關心を寄せている作家に執筆を頼んだり、招い

て座談會を開いたりした。佐藤春夫、中里介山などの巨匠を招いて浄土教觀や信仰談を聞いた。吉田先生にも是非書いていただこうということになつた。先生には「法然と教阿彌」という戯曲がすでにあつた(新潮社版全集第二卷に收めてある)。強盜殺人犯の耳四郎が法然の弟子になるくだりを書いたものである。私どもは先生に法然を扱つた戯曲を書いていただきたい、歌舞伎座の舞臺へ乗せたいと計畫していた。第一の計畫であつた一流作家に昭和の法然上人傳を書いてもらつて大新聞に連載したいという案は、當時すでに佐藤春夫先生が「掬水譚」として小杉放庵畫伯の挿繪で、毎日新聞に連載中であつたから、第二の計畫であつた戯曲の上演を實現したいと思つていたのである。

私は大正の九年、十年に早稻田の文學部豫科で、先生の英文學の講義を聞いた。メービーの文學論とアーサー・シモンズの短篇集を教科書に使つた。しかし教科書などはそつちのけで、大てい毎時間の半分は、先生御自身の人生觀や文學論であつた。「名工柿右衛門の家を訪う」というあの紀行文の内容は、直接に教室で聞いたので印象が深い。そんな因縁があつたので、鑽仰會の幹部で、一度先生をお招きしてお話が伺いたい、ということになつたとき、私がお願いに出かけた。たしか昭和十二年の早春であつたと記憶している。麻布の南浦園へきて頂いて、一夕歡談した

ことがあつた。眞野正順、中村辨康の諸氏が同席した。先生は是非「法然」を書きたいといつておられた。「私が書けば、歌舞伎でも出してくれますし、菊五郎も一役つきあつてくれます」というお話もあつた。

昭和十二年の七月一日に、急な御病氣で奥さんが亡くなられた。先生の御悲嘆がいかに深いものであつたか、それは當時の隨筆によつて察するよりほかはない。先生は妻のために心から讀經をしてくださる方、ということとで、佛縁の結ばれかけていた鑽仰會へ依頼してこられた。その頃、私は病臥中で先生をお慰めすることはできなかつたが、増上寺法主大島徹水大僧正、傳通院貫主木村玄俊師、淨土宗執綱里見達雄師、教學部長中村辨康師などが代る代る參上して、丁重に御回向をした。もともと先生は宗教的な情操の深い人で、キリスト教にも佛教にも、法然や親鸞にも、西行や芭蕉のような俳諧の思想などにも親しんでおられたが、特に或る一定の宗派に心を寄せるということとはなかつた。それが淨土宗の信徒としてのはつきりした氣持をお持ちになつたのは、これが機會となつたのである。

昭和十二年七月二十四日附のお手紙には次の一節があつて、法然上人の御執筆をお急ぎの心持がうかゞえる。

この度、妻他界のこと、全く夢のような心地いたしおり候、御憫察たまわり度候、尙、亡妻の供養につきては一方ならぬ御盡力を賜わり、身に餘る御丁寧なることに、佛もさぞ地下に感泣いたしおり候事と存じ候。御禮の申上げようとて無之候、この上は一日も早く法然上

人をお書きいたし萬分の一の御恩に報い奉り度存念に御座候、悲歎やる方なく候も朝夕の讀經のみは怠らすつとめおり候、その利那のみは亡妻の聲を聞き候ような心地いたしおり候、詢にありがたき佛縁と感謝いたしおり候
文月や陽を斷つ風の吹く
しぐれにもならで淋しや夜念佛

「淨土」に初めて先生の珠玉の名文が現れたのは、その年の九月號である。「新秋諷經」がそれで、「經を讀まうとしても、何としても胸が迫つて聲を出すことができない。偽らぬ心を打ち明ければ、經を捨てゝしまつて、庭の草に飛び出して慟哭したい氣にもなる」というほどの「涙も涸れてしまふ」悲しみのうちに書かれたものである。

一月おいて十一月號には「萬葉寂光」が載つた。それ以來、御逝去になるまで、終戦前後の數ヶ月を除いては、ほとんど毎號、必ず執筆下さつたのであるから、實に先生が「淨土」の爲に御盡力下さつたのは二十年間以上に及ぶのである。勿論、「淨土」は貧乏雜誌であるから、原稿料など拂えるわけはなく、盆と暮に菓子折程度の御挨拶をするくらいであつたのだが、こんなに長い間いつも變らず奉仕して下さつたということは、全く有難く貴いことである。

奥さんが亡くなられてから、毎月一回の御命日には増上寺の大島徹水大僧正が回向に行かれた。私も大ていはいしよに御回向に上つた。その日は親戚や出版界、劇界の人達

がいつも數人見えていて、夕刻から回向が始まつて、それが終ると夕食のおもてなしを受けながら、四方山の話がはずんだ。芝居の話、文學の話、良寛や芭蕉の話。ただし信仰上の正面から切り込んだ話は殆んど出なかつたように記憶する。そういう話は、あまり生々しかつたので、おのずから觸れられなかつたのであろうか。

毎月一日の大島大僧正——いやこの場合は徹水和尚といつた方がびつたりする——の御回向は三年間ぐらい続いた。二年目頃から池田立基僧正も同席されるようになった。徹水和尚の野僧まる出しの風格と訥々とした飾り氣のない話とは、先生に深い感銘を與へたようで、先生は心から徹水和尚に歸依しておられた。

徹水和尚は、知恩院の信徒、坂根彌平翁のことや鶴沼の慈教庵の蠟田本眞尼のことをよく話された。二人とも和尚が深く尊敬している人であつた。とりわけ、坂根翁についでの話は、毎回の續き物というふうに、少しずつ次から次へと話が續いた。徹水和尚は、吉田先生に、「あんたは文章が上手だから、この話を書いて下さい」といつたふうな言い方で、坂根翁のことを書いてくれるようにと、依頼された。先生は話の途中で、時々大事な點や人の名などメモを取つておられた。それが後に「浄土」に連載された「坂根翁のこと」である。

「浄土」の編集部からは、二十年の間に若い人達が代りに訪問して原稿を頂いた。東慈道、川端祐輔、道瀬幸

雄、村瀬秀雄などの諸君は戦前に、藤田寛雅、眞野龍海、水谷哲雄などの諸君は戦後にお邪魔して、先生の人柄に接して、それぞれ貴重な何物かを得ている。

藤田君が鴻ノ巣町の町長に推薦されて、その日に不慮の災難で急逝したので、そのことをお報せかたがた、私は眞野龍海君を紹介するために、先生をお尋ねした。藤田君の死について、先生は心から驚いておられた。しばらくは言葉も出なかつたくらいであつた。

一昨年の夏、「浄土」もすでに創刊以來二十年になります、と手紙の端に書いて差上げたところ、先生からのお手紙の一節には、

「浄土」も最早や二十年の歳月を閱しますとの御言葉にて、今更ながら感無量でございます。大島徹水先生や藤田寛雅さんのことなど偲べれます。人生流轉の相を見るにつけても、年毎に弱りゆくわが身の果を思い、寂然たるものがございます。

とあつた。

「法然」は二十後になつても、ついに出来上らなかつた。法然を書くのは難しい。これは先生が度々口にせられたことである。先生は何度か想を練られたのであろう。がついに執筆されるまでには至らなかつた。

「法然や親鸞にあまり芝居をさせてしまつてはいけないので、書くのが難しいのです。」

これは何度もうかつた言葉だが、最後に龍海君とお尋ねした時も、そんなお話をしておられた。(大正大學教授)

先生と編輯部



眞野龍海

吉田先生は逝かれた。「浄土」誌の大きな心の柱であつた。特に晩年の御不自由な身體で、月々確實に寄稿された事については、會員諸氏とともに感謝しても感謝しきれない思いである。

一步々々の御歩行も、一はし／＼の御食事も御付添の手を借りておられる御生活の中から、頂く玉文は、恐縮の外はなかつた。いつもの毛筆書きが、ある時、ペンに代つたので、お尋ねすると、私はペンで書くと、病氣のせいだ、肩に強く響いてつらいのですが、印刷所の方が読みづらいつと思つてペンで書きました——との御話であつた。先生は口述、代筆でなさつたら如何と思うたのであつたが、只の一度も、そうされた事はなく、雅味溢れる書體で、きれい

な和紙の原稿用紙に、推敲の跡を残したものを頂いた。もつとも、印刷所でも、先生のを文撰する人も決つていて、初校でも、よく拾つてあつた。私も念入りに校正をしたつもりだつたが、或る時、毎日新聞の山崎さんに、君、先生の文章數ヶ所に鳥とあつたのは、あれは鳥だよ、と注意された時は、此以外に随分失禮をしているわけだと思つたが、先生は文句を一言も云われなかつた。遅れがちな發行に對しても不行届な私についても、そうであつた。しかし、先生と對面していると、なんとなく、自己の不徳が反省されてくるのであつた。

時には、先生の宗教はなんだろうと考える事もあつた。キリスト者も、どの佛教の宗派人も、藝道の人も、先生の文章を去來し、淡々たる寛い宗教の世界を逍遙する。先生のお話で、理窟めいた思想・宗教・哲學の話は一度も出なかつた。しかし、あらゆる宗教・藝術の奥底に流れる聖なるものへの讚美、寛容な態度、自然との融合、諦觀、無常感、悪人を許す心、等々を考えるも、どうしても、東洋的な佛教の底なしに大きな安心の上に居られたように思われる。

いつか、父がお借しした法然上人全集の話をされていた。それは、ねずみが、いろ／＼本が、ならべてある中で法然上人全集の表紙ばかり嚙めるのですと、いかにもふしぎ

そうに、ねずみにもやはり上人の教がわかるのでしようかとでも云いたげに、話されていた。先生らしいと思つて聞いていた。法然上人のような大人格は、なか／＼書きにくいとよく話されていた。無學無智と雖も、又、有學有智であつても學に街わす、平凡に徹し、その道に生き、利害を超えた人生の風光に楽しむ人々が、筆に出てくる點は、一文不知の生かされる法然上人の教と軌を一にしているとも云えるのではないかと思う。

先生の應接間には、いつも同じ位置に、西國遍歴の時の傘と杖が置かれてあつた。

× ×

危篤の電報で田園調布の病室へ駆けつけると、先生はもう酸素吸入でわずかに最後の生命を持続せられているだけであつた。入院のお話を伺うと、一日でもよいから自由な身體をという、切なる御希望であつたとの事。今更の如くさぞや御つらい事であつたらうと推察された。私共には一口も、ぐちを洩らされなかつたが、死後飾られた寫眞で若く元氣な時代のお顔を拜見すると、餘りにも變つておられるのだ。

本誌を編輯された故藤田寛雅氏のお子さんが小兒癲癇と聞いて、私も、そうですが、こんなにびん／＼していますよと藤田さんと話していたら、二日して同氏が急逝された。そして、私が編輯をお手傳するようになつて吉田先生の宅へ伺う事になつたのであるが、一昨年か、その話が先

生との間で出た。先生は、現當主なつ様を顧みて、眞野さんもそうなんだそうだとおつしやつて、それから、いろいろ日本人が、身體の不自由な人に對する思いやりが足りない事などお話があつた。散歩に出かけても、無情な人が、何氣なしでも、一べつするのは心ない事で、もつと思いやりのある溫い氣持があつたらと話された。私が、私なりに幼少の時、淋しい思い出があり、又、往來で不具なる人と會つても、好奇心や、通り一片の同情で不具不完全な身體面容を、見たり、當人に自覺させたりする事はしないようにする事が何よりである等と申上げたせいか、いつになく心なき人々の視線を迷惑がつておられた。しかしながら、そういつたこだわりは、先生の文章だけ讀んでいる人には氣がつかない位、個人的な愚痴は一切筆に現われなかつた。

× ×

吉田先生の御通夜の日、ある夕刊紙を讀んだら、今の二十代の若いものは、石原慎太郎の名は知らないものはないだろうが、吉田絃二郎の名は知るまいと書いてあつた。當時私は、前者の名前は何者かわからなかつたのでピンと來なかつた(危／＼かしい編輯子です)。しかし、大正から昭和中期にかけて讀書界を風靡した先生の作風は、未だに吉田絃二郎調等と紙上に散見される程、不動のものを持つており、爾後、隨筆に窺われる妙境は、不滅の輝きをいつ／＼までも傳える事でありましょう。(以下三二頁へつゞく)

吉田 絃二郎 著作年表

昭和女子大學近代文學研究室調

書 (題) 名	誌(紙)各及び 發行所名	筆 者	年 月 日
蜥 蟻 (小説)	ホトトギス二一五號	吉田絃二郎	大正 3 7 1
二 つ の 薔 (小説)	早稲田文學一〇七號		3 10 1
地 下 室 の 人 新 日 本			4 3 1
僧 (小説)	ホトトギス二二三號		4 3 10
タゴール聖者の生活天竺堂書房			4 5 5
タゴール哲學の究意中央公論			4 5 1
印度とタゴール	文章世界 第十卷		4 6 1
ドストエフスキの生活	早稲田文學一七號		4 8 1
副 牧 師 (小説)			5 1 1
生 の 悲 劇 日本及日本人六六號			5 4 15
土堤店の息子(小説)	早稲田文學一三四號		6 1 1
メレジュコフスキの二つ			6 7 1
島 の 秋 (小説)			6 10 1
沼 の 花 文章世界 第十二卷			6 10 1
別れ行く人々	早稲田文學一三八號		7 1 1
ア、サア・シモンズと愛の	早稲田文學一四三號		7 3 1
島 生 の 秋 文章世界 第十四卷			7 4 1
麥 日 和 (小説)	早稲田文學一五〇號		7 5 1
「早稲田文學」と「イワン の馬鹿」	早稲田文學一五〇號	吉田絃二郎	大正 7 5 1
藝術家と祈りの心			一五二號
葉 (小品)			一五三號
早稲田大學教授時代			一五七號
疲れたる魂 (小説)		吉田絃二郎	一六一號
財産没收・十年以上の刑罰	日本及日本人六三號		8 8 15
熊 の わ な 文章世界 第十四卷			8 10 1
大 山 郁 夫 氏 新 小 説	文章世界 第十五卷		9 8 1
柔 か な 草 文章世界 第八號			9 9 1
雉子笛を吹く人 (長編小説)	早稲田文學一七九號		9 10 1
草の上の學校・宗教・藝術 (評論)			10 1 1
ダビデと子たち (小説)	早稲田文學一八二號		10 5 1
草 路 春 陽 堂 第三卷			10 6 10
九州旅行者の印象	早稲田文學一八八號		10 7 1
小 鳥 の 來 る 日 新 潮 社 第十三卷			10 7 17
櫻 日 新 潮 社 第十三卷			10 10 1
光 落 日 新 潮 社			10 11 15
白い鳩をたづねて	日本評論社		11 12 1
白 丘 大 同 館			11 11 1
白 路 新 潮 社			11 4 29

現代の女性に與ふ改	父	静	支那	栗の花の咲く頃	一人	ありがたき人情の人	小説高	長編	静	草	熊爺さんの鶏(童話)	父	木	運	砂	壺	草	芭蕉の墓に詣づる記	一人	近代藝術と生の價值問題	草	研究	放浪者	キリストの言葉	維	
第九卷	新小説	土藤義亭發行	新小説	頃實業之日本社	む改	早稲田文學二四六號	新小説	夢アテネ書院	路春陽堂	赤い鳥	赤い鳥	改	新	秋改	新	二二二號	二二八號	早稲田文學二一七號	文化講演集第三回	文化講演會講演速記	外國文學研究第一輯	蕉早稲田文學二〇七號	赤い鳥	葉早稲田文學二〇一號	中聚英閣	
吉田絃二郎	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	吉田絃二郎	
昭和	15	15	15	15	15	15	15	14	14	14	14	14	14	14	13	13	13	13	15	13	12	12	12	12	11	
2	10	10	9	7	7	7	5	12	7	5	4	2	2	2	9	8	4	3	7	13	12	12	12	11		
4	27	25	1	31	16	1	7	27	16	1	1	12	11	14	1	1	1	1	16	17	19	1	1	7		
1																			改	30	14	1	1	20		
春	戯曲	孤獨なる	白雲	草を歩み	戯曲	上	山	秋の山をたづねて	青	小説	長篇	文藝全集(47)	現代日本	吉田絃二郎傑作集	新選吉田絃二郎集	わが詩わが旅	生命の彼	木に凭りて	春	ある歩哨の話(童話)	旅	石に撃たるゝ	明治大正文學全集(39)	土と人と	旅	甚内さんの旅(童話)
日新	改	女文藝春秋社	女文藝春秋社	て文藝春秋社	城改	剣	記	早稲田大學出版部	鳩	曲	詩と	藤森成吉集	吉田絃二郎集	吉田絃二郎集	吉田絃二郎集	早稲田大學出版部	岸	新	ば文藝春秋社	赤い鳥	雲	女中央公論	春陽堂	葉日本青年館	人改	赤い鳥
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社
第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二	第十二
號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號	號
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	
12	11	9	8	5	4	1	12	11	9	6	6	5	2	11	7	4	3	3	10	10	8	7	6	6	5	
1	1				1	1	1	1				15	10	4	8	30	19	1	1	1	15	20	10	2	1	

芭蕉・夜船・草の詩改造社	吉田絃二郎童話集文藝春秋社	吉田絃二郎全集第十三卷新潮社	第八卷	第五卷	天城を越えて改造社第十四卷第八號	思想の朝改造社	G線上のアリア新潮社	吉田絃二郎童話全集(1)改造社第十四卷	渡木村軍曹と赤靴(秋)改造社第十四卷	吉田絃二郎童話全集(2)改造社第十一號	(幸福)な地平線(3)改造社	(小鳥も歸る)(4)改造社	(金明水銀明水)(5)改造社	(蜜柑畑)感想集煙れる田園新潮社	小鳥の來る日改造社	微風の來る前改造社	無限改造社	感想集草の葉は歌ふ改造社第十五卷第七號	白い雲と茨の花改造社	草光る新潮社	人間苦々集日本青年館	落葉集日本青年館	戲曲皇帝ナボレオン改造社第十六卷第四號	靜夜曲新潮社	木に凭りて改造社	吉田絃二郎全集第十八卷改造社
--------------	---------------	----------------	-----	-----	------------------	---------	------------	---------------------	--------------------	---------------------	----------------	---------------	----------------	------------------	-----------	-----------	-------	---------------------	------------	--------	------------	----------	---------------------	--------	----------	----------------

9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	5	5
6	5	3	3	1	1	8	7	6	5	5	4	3	3	2	11	11	11	10	9	8	8	11	10	9		
15			1				1										1			1	20	5	5			

吉田絃二郎

昭和

吉田絃二郎全集第十七卷新	吉田絃二郎全集第十一卷新	吉田絃二郎全集第七卷新	吉田絃二郎全集第一卷新	山家日記	春の逃げ水	吉田絃二郎全集第十六卷	吉田絃二郎全集第二卷	小説山鹿素行改	吉田絃二郎全集第十五卷新	院長さんと僕たち(童話)赤い鳥	吉田絃二郎全集第四卷新	静かなる土	春の日の
記改造社	記早稻田文學	赤い鳥	赤い鳥	記	水	改造社	改造社	改造社	新潮社	新潮社	新潮社	土	日
第一卷	第三號	第八卷	第八卷	第六卷	第十四卷	第二卷	第二卷	第四卷	第九卷	第十卷	第四卷		

[illegible]

山家日記・心より心へ	草光る・生くる日の	小鳥の来る日・煙れる	わが詩わが旅・梅の咲く	吉田絃二郎感想選集第二卷	一が旅の	わが旅の	旅二	小説山遠け	感想集我れひとり思ふ	島ゆくの	旅	生	随想時局に際して思ふこと	身邊や秋や」日記	一夜の悲劇	文學讀本(秋冬の卷)	東北紀行	高原の臥し	草に	文學讀本(春秋の卷)	落柿舎を訪ふ	青	天城の早	戯曲集二條城の清正他六篇	梅の咲くころ	思の	吉田絃二郎全集第十卷	秋の
第四卷	第三卷	第一卷	第二卷	第二卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷
新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社	新潮社
第18号	第20号	第10号	第18号	第16号	第11号	第8号	第1号	第20号	第11号	第3号	第12号	第12号	第12号	第12号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号	第11号

吉田絃二郎

昭和

14	14	14	14	13	13	13	13	13	13	12	12	12	12	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	10	10	10	10
7	6	5	3	11	8	8	6	6	3			9	9	11	11	11	10	8	7	7	5	2	1	12	12	10	9	
18	20	10	18	16	5	1	20	11				1	1			1	19		1		1		28	30	16	25		

黄	わが文學と生	「夜や秋や」日記	静観の	旅よりの旅	わが旅の	武蔵野	壽貞	静かなる思	大いなる	思想の	加能君のこと	多磨のほとり	武蔵野小	わが文學と生	旅ゆくところ・春の	青鳩・生命の	吉田絃二郎感想選集第八卷	人集山の子海の子	童話	愛馬の	白日の	吉田絃二郎感想選集第七卷	わが旅の	わが人生と宗教	静かなる土・夢の丘	木に凭りて・雑草の	吉田絃二郎感想選集第五卷
抄中根書房	活中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房	記中根書房
第23号	第24号	第23号	第23号	第22号	第22号	第21号	第21号	第18号	第18号	第16号	第16号	第16号	第16号	第15号	第15号	第15号	第15号	第15号	第14号	第14号	第14号	第14号	第14号	第14号	第14号	第14号	第14号

吉田絃二郎

昭和

26	24	23	23	22	22	21	21	18	18	16	16	16	16	15	15	15	15	15	14	14	14	14	14	14	14	14
3	12	12	11	8	3	7	2			11	9	2	2	10	10	5	3	1	12	12	12	12	12	10	9	
20	20	20	15	10	5	15	20			24	1	19	1	25	21	14	8	19			27	5	1	19	5	

ホノルル通信

——第五信——



ホノルル浄土宗別院にて

松 濤 弘 道

日本人に最も缺けているものと云えば、
 數多くの中で第一まづ個性の缺除を掲げね
 ばなりません。どうしても日本人と西洋人
 の性格を比較してみると、此の個性の有無
 に歸着するのです。

私は心理學を専攻した譯でないので嚴密
 な「個性」を定義づける事は出来ませんが
 此處では一應その意味を限定して「精神的
 自我を形づくるもの」と云う事にして置き
 ましう。即ち換言すれば、私達には肉體
 的にも社會的にも他人と異つた環境の下に
 育つた譯ですから獨自のパーソナリティを
 持つ様になり、其處から道德的、宗教的信
 念が壞成されて來ていると云えましう。
 處が日本人には西洋人と比較して、その個
 性が社會の制約になつて壓迫され、歪めら
 れて次第に摩卑してその存在さえも疑える
 程、無きに等しい状態におかれているのが
 注目される事です。此の個性を失つた平均
 日本人とは他人の意見に妥協し、權威に追
 従し、至上絶對者に盲従し、ひたすら自分

の個性をかくす事によつて世の秩序安寧を
 保とうとする善良なる人々を指します。大
 古より人の道として説かれて來た絶對服従
 の精神は上にさからう愚を「長いものには
 卷かれよ、太いものには吞まれよ」として
 教え込まれて來ました。又臣民の道は「自
 分の身は自分の身で無く、お上に仕える身」
 として「滅私奉公」の美德を培い、身の安
 全を保つ爲には「障らぬ神にたたりなし」
 として社會や他人の不正をも默認する寛容
 な性格を植えつけました。

此様な當り障りの無い、云わば角の無い
 丸味のある人格が至上のものとして日本人
 には強く要求されて來たのです。そして日
 本人には個性を持つ事が罪惡でもあるかの
 様にさえ云はれて來たのです。これは丁度
 強い個性の表われである戀愛が罪惡である
 と同じ様に「個性」の擡頭は社會の秩序を
 亂し、上下主従關係に縛られた日本と云う
 名の一大家族制度の崩壊を導くからに他な
 らないからであらうと思はれます。個性が



〔寫眞説明〕 ワイキキの濱

白珊瑚に囲まれた島のせいか海の色が日本のそれと比較するとまるで異なり、ネブイ・ブルーの明るい色です。空の色もはつきりすき麗る様で街全體が又緑の樹で覆はれ、四時花々がみだれ、正に此の世の極楽の様です。

捨なく指摘し合い、かえつてこちらが見ていてハツとする程です。よくこちらの人は日本人を見て「どうも日本から来た人は同じ様な顔と性格を持つている」と評しているのを耳にします。語學力の差から或る程度の劣等感を天引しても、日本人は物をよく言はぬ眠れる獅子の様です。自分の主張をはつきり傳えずに、又判りもせず「イエス」「イエス」と答える我が善良なる日本人が多い様です。

日本と云う井の中の社會ではそれでもうまく通用するかも知れませんが、こちらではその様な「イエス・マン」は社會人として最下位の地位におかれます。ハイ・スクール

の學業成績表を見ても判る様に、その中に性格評價の欄が有つて、其處の「自信」と云う項目に「他人の影響を容易に受け、

絶えず遠慮深く、はにかむ性格の持主」は一番最底の點を取る様になつてゐるので

す。これを見ても判る如く、如何にアメリカでは個性を重視するかがわかるでしよ

う。こちらの理想的人間像は「強い個性の持主で、それをユーモラスににじみ出す人物」であると云つても過言ではないかも知れません。

此處には絶對の權威と云うものがなく、各自の總意によつて築き上げた社會なので、分擔された責任に耐え得るだけの強い個性が要求されるからに他なりません。特に機械文明の高度に發達したアメリカに、もしその國民に個性と良識が缺けていたならばデモクラシイも、とうの昔に崩壊していた事でしよ。

以上個性と云う面から日本人とアメリカ人の性格を比較診斷しましたが、この様に日本人に缺除がみられるのも、長い間、特殊な社會狀況下に置かれていた外的條件が積り重なつて日本人の性格を歪めたと云えるでしよ。それで次回には、その最大原因と思われる家族制度について、眺めてみる事に致ししよ。

では今日はこれまで、皆さんお元氣で。

無いのですから、その人に「權利」も無く「義務」もなく、従つて「責任」もないのが當然と云はねばなりません。いつも上に追従していればよいのですから自分の責任がなくて氣安くて良いかも知れません。處がこちらに来て驚いた事に、アメリカ人の一人一人に強い個性が感じられることです。いくら仲良い友達でも間違があれば容

祖
 法
 然
 上
 人
 の
 歌

第二回

澤田岳潤



第四期の歌

和歌は、ダラニであり法間であると大徳の歌人はいふ。

ダラニであり法間であるというから、いきおい高僧大徳の歌は藝術として第二義的であると主張する歌論者もあります。

また大徳高僧の歌は主旨が至難で了解に苦るしむと一般歌人はいつています。

それはその歌論者が淨土の信仰とか禪門の悟りといった面に縁遠くして、その境地に無關心であるための論議でないかと考えられます。

されば法然上人の歌の内容性格が道歌の部に属するかといへば決して、それではなく、また教化のための歌、無理強の歌でなく、世にもすぐれた、かほり高い藝術文學として、また天分ゆたかな創作として、たれ人も模する事のできない法然上人独自の歌であります。

道歌といへど勝れたものは不朽な文學であつて勅選歌集の中にも釋教歌として一部分を設けられあるを見ても明らかであります。

歌そのものに就て論議する事は、それ〴〵の人にまかせて、たゞ法然上人の歌が桑門の歌でありとはいへ、その創作品である歌に就て、ひたすら渴仰の思いを捧げて、その歌の徳を拜して上人の眞生命を仰ぐのみであります。

祖法然上人の歌を拜して直觀に感ずるは、どの一首を見ても澁滞くのない平安な心に打たれる、水の低きに流れ、雲の悠々と動く、きはめて自然な感情に情緒に春の日の暖かさを感じます。

それは歌を創作された上人が、その御生涯の時代に於て思想も信念も圓熟しました晩年時の創作であると考えられます。

盛壯年時の歌は一首も無い、唯ひたすらに道を求めて止まなかつた上人、その時代の人として歌に心うごかされた事はあつたとしても、それを創作するほどに餘裕がなかつたであらうと思はれます。

推尾増上寺法主はその著作「日本淨土教の中核一名法然上人下山開宗思想史」の中の一文、第七章「最高潮しづけき心」と題して法然上人の歌に就ての感慨をのべられています。

短文ではあるが、いろ／＼と註解や考證を擧げて讃仰されていて法然上人の歌に心を寄するものにとつては尊い参考となるのであります。

その中に「これらの歌は殆んど第四期に屬すといはれ」その四期とは法然上人開宗時の年代である四十代を一期として十代を一期として順を追ひ、第四期とは七十代の時であります。

また、その文中に

「その頃、定家卿などの力で和歌流行したが上人は余りよまれなかつた。この頃、いくつかの歌が、のこされることにも、お歌にも静かな心の響きが傳はり、その圓熟靜寂の心境が拜はれる心地がする」

とあるが如く法然上人の歌は晩年老境の創作であります。

七十代の晩年の創作であるが、はつきりと歌を詠まれた年代の明かなるは勅傳三十にある歌に前書があつて、特に「上人手づから書付給へりけり」とあつて五首の歌があり、その最後に「元久二年十二月八日源空」とまで記録されています。

その五首は

千とせふる小松のもとをすみかにて無量壽佛のむかへをぞまつ
おぼつかなたれかたれかいひけん小松とは雲をさゝふる高松の枝
池の水人の心に似たりけり濁り澄むこと定めなければ
むまれてはまつ思ひ出ん古里に契りし友のふかき誠を

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて淨土の莊嚴みるぞうれしきとあつてその創作時の年月日まで明らかに記されています。

この元久二年は法然上人の年譜に依れば七十三歳であつて、歌を詠まれた日まで記されている。

どこで創作されたかといへば小松谷の小御堂であつて、この所に五首の歌を詠まれた。

歌も一種の連體形であつて文獻にある如く十二月八日に一氣に創作されたものに違いありません。

このほか創作時の年代の明らかなるは勅傳第三十四にある歌で藤原兼實公への惜別の返歌で

露の身は此所彼所にて消えぬとも心はおなじ花のうてなぞ

と承元元年春三月法然上人は既成教團の壓迫や門弟の放逸などの罪で遠く山河はろけき讃岐へ流罪の法難に逢はれた。

その時七十五歳の老齡の時の創作である。

次で創作時年月の明かなるは勅傳三十に記されたる十七首の中のある詞書に依つて考證せられる。

柴の戸に明け暮れかゝる白雲をいつ紫の色にみなさむ

との御詠で御流罪の勅許あるも未だ京洛往復を許されず攝津勝尾寺に留錫中の創作です。

法然上人の年譜に依れば勝尾寺滞在は承元元年十二月から建暦元年十一年まで四年余りの時代であつて、その間の何時頃の創作なるか判然しないが法然上人歌集の註解者である湛澄上人の「空華和歌集」の中に承元二年七十六歳の折の創作であると記されています。かく上人の歌を創作された時代の確然と文獻にあるは前述した通

りです。

このほか御創作時の不明なる歌も殆んど御老境時のもので早くとも開宗以後に於ける創作と考へるが實際に近いようです。

かく上人の歌は推尾博士のいはれる如く第四期の晩年時、しかも七十余歳の創作ばかりといつてもよいほどです。

ひとり歌といはず。すべての創作は年齢環境によつて、その内容性格が異なつてくるは自然の理です。

老成圓熟の境地の上人の歌は、いかにも心境の静寂が表現され、それと共に、その底を流れるものは、いろ／＼と迫る身邊の消息と念佛門に對する教權の逼迫に直面された心意の感懷が深くも偲ばれるのであります。

ことに、この時の上人の胸には、まことに孤獨なさびしさ、わびしさが潜まれて、しかもその底を流れる一貫した念佛生活、信仰法悦の尊さが、どの歌の内容にも溢れています。

上人手づから書付給へりけりとある七十三歳の創作で連體形とも見るべ五首の歌には特に、その感懷が、ひとしほに深く感ぜられます。

「法然上人和歌」の著者は、この五首の歌について

「千年ふる小松のもと、あこがれの無量壽佛のお迎へを待ちながら、或は悠々かまだすさに、かゝはる古松を仰ぎ、ときに池水と動く心を見つめ、また苦闘の同行の上を案じ、つひに口稱三昧究竟の法悦を詠ふ」

かく讃仰の筆を染めてゐます。

また、法然上人御傳抄の著者は

「けだし南都北嶺の喧騒世塵の煩累を厭ひ給へるあまりの作ならん」

と記して上人創作時の胸致を想像しています。

なお淨土宗歌と制定されている「月影の」有名な歌に就ては、その創作時は不明ですが法然上人開宗以後の創作であるか晩年時のものであるに相違ありません。

ほんとに法然上人の歌は静寂そのものであり法悦の溢れで、しかも信仰のためには「死をも辭せず」と告白されました烈々たる志士の風貌と余剛可壞の信念が感ぜられます。

その歌と勅選和歌集

法然上人の和歌を註解された澄澄上人の著作「空華和歌集」の序文の仲に

「やんごとなき歌仙達に年來なれしみしみて歌の道もてぞ論じ給ふべければ、その詠のめでたきは、ことはりぞかし、されば代々の勅撰にも、あまた入て侍る」

とある如く上人の歌は數種の勅撰和歌集に入撰されています。

法然上人在世時の勅撰集には撰出されていません、萬葉集以後の歌集で有名なる古今集について新古今和歌集など撰集されていますが上人の歌は一首も入撰されていません。

いま上人御生涯中に勅撰の編集されしを列記せば

一 詞花集 皇紀一八〇四 上人 十二歳

二 千載集 皇紀一八四七 上人五十五歳

三 新古今集 皇紀一八六三 上人七十三歳

これは佐々木博士の日本文學史辭典にある勅撰編の記年を法然上人年譜と校合引照した法然上人の御年時であります。

かく三種の勅撰集には上人の歌は一首も撰進されていません、詞花集は少年時に計畫されたもので論外ですが千載集は淨土開宗後十年の上人五十五歳の時であり新古今集は上人七十三歳の時であります。

七十三歳の十二月に五首の創作ありますが法然上人の歌は一首も入撰されていません。

法然上人が最初に勅撰和歌集に撰進されたは玉葉集であつて上人滅後百二年であります。

この間、勅撰集も五種撰進されましたが上人の歌は一首も撰進なく、まったく空白であります。

その空白時約百年間に於ける勅撰集を列記すると

- 一 新後和歌集
- 二 續後撰和歌集
- 三 續古今和歌集
- 四 續十道和歌集
- 五 新後撰和歌集

かく上人滅後五部の勅撰集が撰進されていきますが御在世中と同じく上人の歌は一首も擧げられていません。

これは御在世中ですら歌數も少なくて歌人としては認められなかつたから、その滅後には法然上人が歌人として、その存在を認識せられなかつたは自然であるように思われます。

それにも拘はらず上人滅後百二年にして初めて玉葉勅撰集に撰進

され、つゞいて他の四部の勅撰に撰進されました。

今、その勅撰集を列記すると共に、その歌を記しませう。

一 玉葉集 皇紀一七九三 祖滅百二年

芝の戸に明け暮れかゝる白雲をいつ紫の色に見なさん

二 續千載集 皇紀一九八〇 祖滅百九年

月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ

三 續後十遺集 皇紀一九八五 祖滅百十四年

池の水人の心に似たりけり濁り澄むこと定めなければ

四 新千載集 皇紀二〇一九 祖滅百四十八年

むまれてはまづ思ひでん古里に契りし友の深き誠を

五 新後十遺集 皇紀二〇四三 祖滅百七十二年

われたゞ佛にいつか葵草心のつまにかけぬ日ぞなき

かく法然上人滅後百二年を経て初めて玉葉集に一首撰進され、ついで前記の如く順次に一首づつ入撰され最後の新後十遺集の如き滅後百七十二年にて撰進されたのであります。

歌よむ人が、その歌詠が歌集の權威である勅撰和歌集に撰進される事は歌人として、もつとも期待するところで、なか／＼にその榮譽の得られないのが尋常であります。

然るに法然上人の歌數二十首に満たぬにも拘はらず、その半數に近い歌が歌集の權威である勅撰集に撰進された事は専門の歌人としても稀なことで、それは全く法然上人の歌の徳というべきものであります。

かくて法然上人は世に、いう歌人として初めて登録せられ認證されました。

こゝに、ひそかに考えられるは、その歌の原典文献ともいうべき法然上人の傳記行狀畫圖四十八卷が完成されたからでないかと想像せられます。

この考證とて、あさはかな獨斷に過ぎないのですが、ひそかに、そうとはかには考えられないのであります。

法然上人行狀畫圖四十八卷傳は淨土宗年譜に依れば後伏見天皇正安元年上人滅後八十八年の記載に

「功德院舜品勅を奉じて大師行狀記四十八卷を上る」

とあります。

ついで後二條天皇德治二年祖滅九十六年の條に

「後伏見上皇御誓願あり、大師行狀傳の繪詞を懷書し玉ふ、後伏見法皇御二條天皇隨喜し玉ひ尊圓親王及び大姓大臣實重從二位濟氏從三品行尹從四品定成等、勅を奉じて各數卷を淨書す、凡そ十年を経て正副二本各四十八卷成る」

とあります。

法然上人の歌が玉葉集に入選は上人滅後百二年で舜品の上人行狀畫圖は上人滅後八十八年であるとはいへ、その傳記が一般に普及されなかつたのでないかと思はれます。

ついで上人滅後九十六年にし繪詞傳が大成され、その後十年を経て全く完成されたのであります。

その當時の歌人である藤原爲兼も法然上人行狀畫圖を見て、その傳記中に上人の詠歌あるを發見し、その秀歌なるを見て玉葉集に撰進したものと考えられます。

これに就て玉葉の編輯者たる藤原爲兼の家系なり信仰なりを一應

探りたいと思いますが後日折を見て筆を進めたく思うのであります。

法然上人傳記最古といはれる聖覺の黒谷十六門記を初めとして上人傳は數多著作されしも上人の歌は一二首記載あるのみにて法然上人行狀畫圖ほどに法然上人の歌を記されているのは他の傳記に見えず、これらの點から見ても玉葉集に初めて上人の歌が入選された事も、いきおい法然上人行狀畫圖完成後で、その影響が深いように思はれます。

その後勅撰歌集もあまりなく時代と戰亂つづいて新後十道以後の勅撰には法然上人の歌は一首もありません。

法然上人の歌、いづれの一首も文學的作品として宗教藝術の詩として、まことに傑出した創作ばかりですが、その中に於て五種の勅撰に入選されたものは月影の宗歌といはれる歌を初めとして、かゝやかしい不朽の創作であります。

ことに、その創作時は晩年の信仰思想ともに圓熟ました折のものとて、ひとしおに強く感銘を與へられます。

また玉葉集に入選された一首「芝の戸の」の歌は上人七十六歳の創作、ことに勝尾寺に御留錫中での歌で法然上人最期の歌で辭世の歌とも思はれるもので法然上人決定往生の信念の表現が、ふかくも歌意の底にあらはれて、まことに尊く拜せられるのであります。

(つづく)

x

x

x

x



眞如の世界について

佐藤 密雄

一 世間と佛の世界

聖徳太子に「世間虚假 唯佛是眞」と言うお言葉がある。このお言葉の世間とは私共の人間生活一般を言うのであるし、唯佛の佛は、佛のお言葉や佛の世界を指すのである。其處で此處に言はれてある意味は、人間世界の生活や出来事はすべて「うつろ」な「うそ」なものであるが、たゞ佛の世界だけが眞實であると言うのである。

世間は不信と不眞で築かれた生死の世界であるし、佛の世界は、信と眞の永遠の世界である。だから、人間的世間と佛の世界とは全く異つたものである。此岸と彼岸とである。人は此岸を出て彼岸に行かねばならぬのである。宗教とは人生に眞の意味と目的を教へるものであるが、人生の眞の意味は、眞實の世界を知ることであるし、人世の目的

とは、眞實の彼岸に到ることである。佛敎は、眞實の人生として佛の世界のあることを知らしめ、此の佛の世界に到らんことを教へるものである。

さて、世間と佛の世界との間には、不眞と眞の相違があり、現實と理想のへだてがある。生死する世間を出で、不死の佛の世界に行くとせられるから、此の二つの世界は懸絶して全く異つたものと考へられるが、然し此の二つの世界は實は一つのものであるとせられる。經にも生死即涅槃と言うし、釋尊も生死しながら不死の正覺者となられたし又、人間本來佛であるとも言はれる。

龍樹菩薩は紀元二世紀から三世紀にわたつて印度に生きた佛敎の聖者である。多くの書物を著して大乘佛敎の理論や考へ方を明かにされたが、其中で最も代表的な書とせられるものに中論がある。その中論の中で菩薩は一世間の實

際と涅槃の實際とは僅少の差別もない」とされた。涅槃の實際とは、佛の世界のことである。尤も涅槃とは人間をして世間的生存をなさしめて居る人間性若しくは世間性とも言うべき煩惱（ぼんのう）すなはち不信と不眞の根を根絶することである。不信と不眞の根は無明とも言はれるが、此の無明のなくなつたのが明であり涅槃であるが、明となり涅槃を得たものが亦た佛であり、且つその佛の現じ給う生存が佛の世界である。例へば、極樂は阿彌陀佛の以前にあるのでもなく、又阿彌陀佛と別體に存するのでもなく、阿彌陀佛の生きられる生存が極樂世界である如きである。其處でこのように考へると涅槃と言う文字自身が、人間の無明的生存が、無明なき生存になれば世間がそのまゝ佛の世界であることを明にして居ると言へるのである。

二 世間と如來藏

釋尊は菩提の木と呼ばれるビツパ樹の下で悟りを得て佛陀となられた。佛陀となれたことは生死ある人間的生存を脱して不死永遠の佛の世界に入られたことである。然し、歴史上の釋尊は成道の後も依然として人間達の中で暮し、八十年の生涯を老病死された。生死を脱して不死の世に入られた佛陀の六尺の身は人間と同じに老い病み死せられたのである。然も釋尊は、佛は不死永遠であるとせられ、同時に亦た自身の死で無常の相を現するのであるとせられた。そこで、此様な事實から、私共は、人間の考へ

方即ち分別の仕方から見ると佛陀は六尺の身を無常に老病死されたが、その無常に老病死されたことがそのまゝに佛陀の不死永遠に生きる姿であつたとせねばならないのである。そしてこれが龍樹菩薩の涅槃の實際と世間の實際と差別なきことの實例とも言へるのである。

佛陀は成道と同時に世界全體（法界ほつかい）を身とする法身（ほつしん）を得られたのである。そして全世界の萬象を生かして居る眞理が法身の生命（法性ほつしよう）となつたのである。世界が佛の身であり、世界の萬物の生じたり滅したりするのは佛身である法身の生きる姿となつたのである。釋尊の六尺の身をも含めて一切を生じて居るものは、法性即ち法身の理（生命）であると言うことゝなるのである。

樹の葉や花は充分に開き働いてのち散り行つてこそ次の新たな葉や花が生じ得るのである。そして、古き葉や花が散り新しきそれらが生じてこそ、即ち樹上に花・葉・果等の生滅する姿こそ、樹木の生々として生きつゞける姿である。樹木を佛身とすれば釋尊の六尺の肉身は樹上の花の如く充分に傳導の職を終へて逝つたのである。

此の様な見方からすれば、世界は佛身であつて、萬物は佛身の相である。萬物の無常な生滅は佛身の生ける姿である。人は此五尺の身を佛身即ち如來藏中に生きるのである。如來藏とは如來胎の意味で、萬物は如來藏の中に生かされ、如來の性即ち佛性を生命として生きるのである。

だから人の心性はそのまゝ佛性である。たゞこの心性を夢心にねむらす無明なる人間性が人間心ならしめるのである。そして此の人間心が自身を如來藏から分別し別立して、一如來藏を生きる自身と自身の生きる世界に分ち見るのである。葉や花から見れば、此等を生滅さす樹木は永遠で花は無常にみじめと感ずる如く自己を生かす如來藏法身に對して一回の生滅で消え去る自己主觀のはかなさを感じるのである。人間の無明は、自身を自身で永遠者から引離して有限のはかなさを歎くのである。

樹上の花は自分を樹から分別して自立させても事實としては樹を離れないのである。無明に分別して世界から自分を自立させても、自立した我の自主性は實現出來ずして、すべては「求めて得ざるの苦」となるのである。人生苦も亦その様なものである。いくら觀念的に個身以外を客觀化しても、ついに個身は客觀から離れないのである。如來藏中から自立せんとして、自立し得ず、如來藏と別物と思いつゝ如來藏に支配されて居るのであつて、此處に如來から離れずして悩み、悩み迷いつゝもその心情が佛性である所以がある。

三 人間心と眞如

大乘起信論と言う書物がある。岩波文庫で原文と和譯文と合して九十五頁にしかならない小論であるが、恐らく中國日本で現に行はれて居るすべての佛敎に共通して實踐原

理の書とせられる書物である。又新古の註釋や解説の最も多い論でもあるが、此の書物初頭に次の様な文章がある。

「心眞如とは即ち是れ一大法界にして大總相法門の體なり。謂ふ所は心生の不生不滅なり。一切の諸法は唯だ妄念に依てのみ差別あるも、若し心念の相を離れる時は一切の境界の相なし」

此處にある一大法界とか大總相の法門とかは、此の「全世界」とか此の「全世界の諸現象や萬物のはたらきを統一して」と言う意味に理解すべきである。そしてこの全世界を一法界と見た時に、全世界を一貫して一法界として居るもの、即ち全世界の生命となり全世界を統一維持する眞理自體を眞如というのである。一法界を佛身とすれば佛心と見るべきものであるから心眞如である。従つて萬物中の最も具體的存在である衆生すなはち人間も此の眞如に統一維持されて居るのであるから、眞如は亦人間心の心性でもある。此を衆生心又は一心とも言うのである。個々人の心性と言う意味である。世界の現象は生滅するが、萬物を生滅せしめる眞理なる眞如は不生不滅の永遠のものである。此の永遠の心眞如が生滅する人間の心性であることを亦た、「心性の不生不滅」と言つて居るのである。

起信論には有名な水波の譬へがある。

「大海の水の風に因りて波動するとき、水相と風相とは相捨離せざるも、而も水は動性に非ざれば、若し風にして止滅するときは、動相は則ち滅して、濕性は壞せざる如

く、衆生の自性清淨心も無明の風に因りて動するとき、心と無明とは俱に形相無くして相捨離せざるも、而も心は動性に非ざれば、若し無明にして滅するときは、相續は則ち滅して、智性は壞せざるが故なり。」

と記さるゝものであるが、此は眞如を性とする法界の元來の有り方をば靜平の大海と見、その上に波動する波を人間の自己分別に譬へたものである。人間をして人間たらしめて居るものは無明と言はれる煩惱である。無明は自己が元來は眞如の大海そのものであるを目ざめずして、個を執して自我とし、自我以外を他として、自我の思うまゝに他をあらせたいとするものである。そこで、靜平一味の眞海にこのような無明の風が吹いて、個人我の波が波立つのである。無明の風によつて個我の波が立ち風が止めば波はなくなるのである。是を「水相と風相と相捨離せざるも云々」と言うのである。然し、波となつて居ても波は水たるを失うものでなく、風が波相を立起せしめて居るも大海水を離れるものでなく、風止めば元來の性として直ちに靜平の水に歸ろうとするものである。即ち「風にして止滅するとき、動相は則ち滅して」と説かれるのである。元來眞如たる人間心を、眞如界の一波として自立せしめて居るのが無明で、此の無明が滅すれば、人間心は大總相法門の體に歸し、個我として波立した自我は靜平の大海に譬へられる一大法界に歸り、法界を身とするに至るのである。此が先きに引用した文の終りの「一念の相を離れる時は一切の境界

の相なし」の意味である。個人我を分別してそれに基づいて自他を立てる一念の相を離れば、そこに眞如法界への解脱があることを言うのである。

此の水波の譬へは、悟りの世界を靜平な水に、個々の波の生起を個人心の生起に、風をば無明煩惱に譬へたもので、波が如何に風力に依つて波立つても波は水性を失はず、また水面を離るゝものでないことゝ、波は水性として靜平の水面に歸せんとするものなることを意味させて居るのである。

四 人間的生存の三細六相

眞と信とに靜まつた水上に、無明の風が一個の波を作り上げるのを、個人分別の人間心の成立にたとへて、此をアリヤ識と名づける。そして此のアリヤ識の生ずることを無明業相と言うのである。無明な生存を夢現する個人心の働き出す状態の意味である。

アリヤ識の成立は、眞如海上に夢心の一波の起動したと、無明の風力を動力として此波は生死相續する。夢心の成立は、夢中を生きる自身の分別自覺と自身の生きる境界なる夢の世界を分別把取することとで完成する。言はゞ主觀と客觀の成立で、此中、主觀の成立を能見相と言ひ客觀を見出すのを境界相と言う。

無明業相と能見相と境界相とを三細と言うのであるが、此は夢の世界に譬へられる世間的生存の成立の基礎要件で

ある。能見相は生きる自身の成立で境界相は自身の生きる世界の成立であつて、此の二つを統一維持するのがアリヤ識の無明業相である。アリヤ識は生きる自身と自身の生きる世界を映出して映寫機の如く此を統一し持続し維持して居るのである。其處で、人間の生存は、無明を動力因としたアリヤ識が、無明に夢想した生存界であつて、その主觀自身も客觀界も、すべてアリヤ識の無明に夢見る幻影にすぎない。然し、夢想者は幻影を事實と見るのである。

三相に依る夢想のような人間的生存の成立は此を根本不覺と言うのである。此様は人間的生存の成立そのものが根本的な迷いであると言うのであるが、その様な根本不覺の生存の上に更に第二の迷い（枝末不覺）の生存の様相が現れられて行くのが、人の日常生活である。此の日常生活の様相を説明する爲めに第二の迷いの相なる六相が説かれる。

六相の第一を智相と言う。此は無明業相から生じた能見相無明業相から生じた能見相（主觀）が境界相（客觀）をとらへること、言はゞ夢の主觀が夢現の客觀事物を實在として捉へてあれこれと分別することである。理性に基づいて考へるのではなくたゞ感情や感覺のまゝにこゝろよきものを愛するものとし、そうでないものを憎しみを以て分別するのである。

第二は相續相と言はれるが、これは、智相で愛憎等に分別したものを反省することなく、そのようなものとして愛

し又は憎しみつゞけることである例へば、美人を好ましいと感じたのち、それを反省することなくその好まじき美人と言う分別を固定相續することである。

第三は執取相で、これは、愛憎の區別を固定相續して居ることから進んで、その愛するものを得たいと執着するに至ることである。例へば、美人を好ましいとしたことから進んで戀情止みがたきに至るようなのを言うのである。

第四は計名字相で、これは執着の對象を種々に稱讃し、その稱讃の言葉に依つて愈々執着を浴することである。例へば、或る美人に戀情をいだきその美人のよさを百合の花やぼたんの花にたとへて稱讃すると、更にその形容した花等の言葉にしげきされて一層に戀情を深める如きことを言うのである。

第五は起業相で、これは執取相が計名字相で深まつてついに行動に及ぶのである。好物を執し、それをばらの花の様に麗はしいと思うた結果はついに感情を抑制し難く、何としても自分のものとせんとして行動に及ぶようなことである。

第六は業繫苦相で、これは、智相から起業相に至る過程を経た結果、例へば、好きなものを入手したが、その保存や維持の爲めに苦勞することを言うのである。他人のものを盗れば制裁に苦しまねばならないし、入手に無理をすれば結果は樂でない筈である。人間の生存の苦はすべて此様な業繫苦相に外ならない。

以上の六相は、人間の日常生活の過誤の迷執が行動に及ぶこと、更に人はそのような経過で自分の行動で自分を苦に導いて居ることを明にするものであるが、此は宛も夢の中の苦しみである。夢の世界を幻影すること、無明業相のアリヤ識が能見相と境界相を現することが第一の根本の迷ひであり、此を夢中と知らずしてその中で、六相を現することは第二の枝末の迷いである。其處で起信論には次の様に述べてある。

「是の故に三界は虚偽にして唯心の所作のみ。心を離るゝときは六塵（迷い）の境界なければなり。此義は如何。一切法は皆心より起り、妄念より生ずるを以てなり云云」

心を離るゝときは、根本の辱いも枝末の迷いもなくなるというのである。心をはなれるとは、此の三界とも呼ばれる虚偽夢幻の人間生存を維持して居るアリヤ識がなくなること、眞如海の波が靜することである。然しそれは私共の現實に取つてどのようなことであろうか。私共はやはり歴史上の釋尊の生涯に目をそゝがねばなるまい。そして案ずるに、天壽のあらん限りを生き、法界から與へられた天分を職充分に役立てつゝ、生死することが眞に生きることの自覺に迄至らねばならない。それには増上慧學と言はる、叡智の練磨か、大乘起信と言はるゝ純眞な信を得ることかいづれかゞなされねばならない。

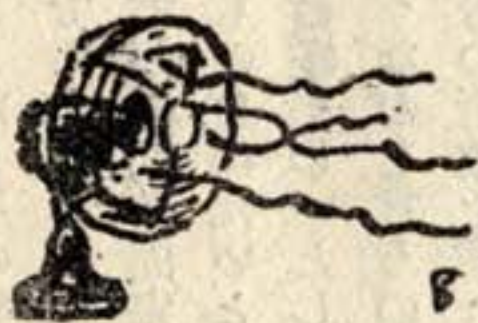
佛教の道は難解の山を登るか、難信の峠をこすかせねばならない。たゞ安易ではないのである。（大正大學教授）

（十五頁よりつづく）

所謂、太陽族の横行する刺激の多きになれた世代には、超俗古談の妙好の文は氣を引かぬかも知れない。だが、一句、一文一文、先生が筆によつて浮彫りされた理想像、理想世界は永代搖がぬものを持つてゐる。

× ×

歌舞伎座の廊下に、名優吉右衛門丈の清正が二條城を望む畫が掲げられてある。華やかな芝居見物の人々が、前を毎日、毎夜往來しているが、云うまでもなく先生の「二條城」のラストシーンである。戦後は修復なつた同座のこけら落し、同丈の一週忌追善等に上演された。先生、先生と御氣持の合われた吉右衛門丈、そして「清正」とは、何かしら本質的に一致したものを感じる。餘り多くを知らない私にはおこがましい事は云えないが、それは「誠實」ではないだろうか。



後記

○今月はお盆の月である。亡き人を弔い、えにし歳を思い、そして未来のことを考えるに相應しいときである。お盆といえは夏の宵のゆかしい一つの風趣でもある。家ごとに人々は先祖の前にことしの野菜を供えて紙燈籠の涼しき灯のかけで合掌する。

○思えば日常生活の忙しさのため、に考える余裕を失つた現代の人間が、一生の内僅かひとときでも合掌するとか故人のここを偲ぶとかするそういう時間をもつという

ことに大きな意義があろう。それは單なる形式かもしれない。しかしそのような形式をもつたということにやはり深い意味がある。

○名古屋の建中寺で催された浄土教學大會には百余名が参加し、東西の學匠達が日頃のうんちくを傾けての研究発表はなか／＼熱をおびていた。未来の浄土教學を擔う若き人々も意氣軒昂。かえつて未

完ながら眞摯な態度の少壯學徒に人氣が集つた由。しかし浄土の諸先生はやはり賢實であり、大會の花形であつたとの評ばん。

○去る六月廿五日、列車より轉落して死去された琴の宮城道雄氏をいちど浄土でインタービューする企畫があつたとその直後に龍海先生より伺つた。そのとき泌々と與えられたチャンスは大事にしなればならないネと感慨をこめて語られていた。五十余年の間、斷えず革新の氣をもち續け藝道一途に生きぬいた先生を浄土誌のページに飾ることができなかつたことは返す／＼も残念なことである。

(宮林)

○戦争が終つて十年、健忘性の人には忘れる頃だと云うのに、沖縄の同僚のなやみ、中共では今頃になつて、裁判を行い、多くの人に十年から、二十年に及ぶ有期體刑を云い渡したと新聞は傳えている。○戦争に敗けたのだから仕方がない云つてしまえばそれまでだが長い間を拘禁の苦しみ耐え、こ

れからまた長い刑期を努めるのかと思うと本當に心から同情の念に堪えないと同時に激しい怒りをおぼえる。

猪疑と憎惡よ、永遠に去れ

されば、我等を育しむ

大地は永遠に微笑むであろう
古い言葉だが、大地が微笑むように、私達は愛憎を越えて生きることは出来ないだろうか。

○本號は吉田絃二郎先生追悼特集號。井伏鱒二氏に、吉田先生の文學評傳をお願いしましたが著者の御都合で間合せんでした。次號には掲載出來ると存じます。

○今年は江戸(東京)に江戸太郎重長が江戸城を築城(太田道灌が増築)してから五百年、その遺業をしのび江戸太郎重長公追善供養が、十四日世田谷區役所、同教育委員會、同文化財調査委員會共催で、その菩提寺、世田谷喜多見の慶元寺(住職山田鏡瑞師)で江戸氏後裔、喜多見賢治氏、北見キヨ氏、江戸重富氏參列のもと盛大に行はれた。(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十一年六月廿五日印刷
昭和三十一年七月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信 常

發行人 佐藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八三
發行所 法然上人遺仰會

振替 東京八二一八七番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

御袈裟法衣御調進

- 錦金欄
- 御水引
- 御幡
- 特種織物
- 御打敷
- 稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺

宗務所

大正大學

芝中高校

淑徳學園

御用達

東京都港區西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付